

総動員伝道

総動員伝道の目標

1. すべての人に福音を伝えよう。
2. すべてのクリスチャンがよいあかし人になろう。
3. すべての教会が成長しよう。

聖霊の降臨と教会の前進

総動員伝道 委員 中島 秀一



使徒行伝一・1～4

去る25日起きたJ.R宝塚線の脱線事故は死者107名、負傷者461名を出すという大きな事故となった。これは新潟中越地震やスマトラ沖の大津波と違って明らかに人災である。これほど文明文化の発達した時代であって、否、そうであるが故に起こった事故であるという点に、この事故の特異性がある。我々は文明の利器を得た代わりに大きな危険という代価を支払う結果となった。我らはどこに身の安全と心の安らぎを求めたらよいのであろうか。

ここに福音の出番があり、教会の果たすべき使命がある。それはこの世の物質偏重主義に警鐘を鳴らすと共に、人々を神に立ち返らせることである。そのために教会はその原点に立ち返り、改めて聖霊の豊かな注ぎを受けるために、神のみ前に跪く者と

ならなくてはならない。

父の約束

主イエスは復活後40日間その復活体で弟子たちをはじめその他多くの人々に顕された。そして昇天される前に「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。」(使徒一・4)と命令された。「父の約束」とは、かつて「父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう」(ヨハネ一四・16)と言われた主イエスの言葉を指している。

二階座敷の祈り

弟子たちは主の母や兄弟たちと共に、主イエスのご命令に従ってエルサレムに留まり、二階座敷に集まって、「心をあわせて、ひたすら祈りをしていた」(使徒二・14)のである。ここに今日の教会が学ぶべき事項が3つある。

1、祈るために集まること

彼らは一つ所に集まって祈った。聖書は「集会をやめることはしない」(ヘブル一〇・25)と勧めている。

2、聖霊を受けること

彼らの祈りの目的は聖霊を受けることで

あった。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられる」(二・5)とある通りである。

3、体制を整えること。

彼らは祈りを通して崩れかかっていた体制を立て直した。具体的にはユダの欠員を「復活の証人」という新しい使命を帯びた弟子としてマツテヤを選んだ。

聖霊の降臨

やがて五旬節の日に聖霊が降臨し、一同は聖霊に満たされた。そして聖霊に満たされたペテロの説教を通して3千人ほどの者が悔い改め、バプテスマにあずかり、仲間に加わった。さらに福音は聖霊の働きによって地中海沿岸に及び、ついにキリスト教はローマ国教となるに至った。その後幾多の困難を経ながらも福音は全世界に宣べ伝えられ、キリストの教会が生み出され、現代に至るまで発展し続けてきたのである。

21世紀に入って世界は大きく変わりつつある。教会もまた変わらなくてはならない。すべての信徒は教会に、教会は超教派の働きに集まるうではないか。そこで心を一つにして祈るのである。初代教会が新体制を組んだように、我らもまた悔い改めて主に立ち返り、神に信頼される新体制を組むべきである。そこに父の約束である聖霊は豊かに注がれ、そこではじめて宣教は前進すると確信する。

一対一で

今の時代は「総動員」することが難しいと感じています。スタンダードレイと言言葉(和製英語)がありますが、みんなと一緒に何かをするというのではなく、自分ひとりで自分の気に入ったことをして他人の目を引こうとするのです。

となると、地域全体に呼びかけて「みんな」伝道しようというのは時代遅れなのかな、と疑心暗鬼になります。ある人は「クルセードの時代は終わった」と言います。でもピリー・グラハムは今年もNYでクルセードをしようとしています。

来年の5月を

目指して「首都圏宣教会」の準備が始まっています。もう20年も前に「首都圏宣教会」がもたれました。クルセード・タイプの伝道会です。それを「そう言う時代ではない」と言われながら、やろうとしているのです。投網にかける伝道をしようというのではありませんが、現代の沈滞ムードを打ち破りたいと言う信徒の呼びかけで動き始めています。

「総動員」が難しいのであれば、「一対一」はどうでしょうか。総動員伝道の土台もここにありま。クルセード伝道もここに土台があります。ひとりひとりがしっかりとクリスチャンになっていくことが重要なことです。忙しい現代のクリスチャンに対して信徒研修会を数ヶ月に亘って行なうことが無理になってきています。総動員伝道ではひとりひとりをこつこつと「しっかりとクリスチャン」に育てていく教材「よい証人」があります。もちろんグループで学んでくださってもよいのですが、一対一で学んでくだされば幸いです。これは6週間の学びです。でも1回に1時間半をかければ6回で学び終えることが出来る教材です。

伝道メモ

52



韓国の有名な教会にオンヌリ教会があります。その教会は「一対一弟子

養育聖書研究」をしています。ほかに特別なプログラムをしないのに一対一の学びを忠実に、根気よく、忍耐をもって続けているうちに何万人の会員を育ててくることができました。「総動員」しなくても「一対一」で、信仰と情熱と忍耐をもって一人のクリスチャンを大切に育てていけば、全体に大きな影響力を及ぼすようになっていくのです。この新しい年度から始めてみてください。勢いが付けばグループで、そしてついには「総動員」して取り組めるでしょう。

教会を
建て上げる喜び

30

(信徒のためのセミナー)

小助川 次雄

第七課「教会形成」の実践プログラムの例(その1)

はじめに

どんな学習でも、学んだことは実践に移されて初めて意味が出て来ます。これまで、約30回にわたり学んできました。本当に小さな学びでしかなかったかも知れません。しかし、先にも書いたと思いますが、実は、これらのことから、ある地方の教会で実践されたことに基づいてまとめたものです。地方で開拓して20年前後で、しばしば百人以上の礼拝をささげるに至った教会のケースです。それは、言うまでもなく、いろいろな意味を含めて、全く主のあわれみ深いみわざによることでありましたが、一つの現実でした。

「できるところから、できるだけやる」ということ、もちろん信仰によって、祈りながらするのですが、そのとき、主の豊かな、そして、不思議な恵みとみわざに与らせていただいたのでした。

もちろん、これで完成したわけでも終了したわけでもありません。地上の教会は戦う教会でもありません。絶えず、いろいろな「勢力」と戦いながら福音の宣教と教会の形成を進めなければなりません。「前進」、「停滞」、「後退」、「失敗」の時期や状態があります。アップダウンもありません。そして、一喜一憂します。そして、信仰が問われ、吟味され、訓練されて成長し、また前進へと促されるのです。

一貫して必要不可欠の条件は、神への信仰とみことばへの信頼、それに祈りです。使徒パウロが、テモテへの手紙の終わりに、おごそかに語られたことばは、今この時代にも、全く当てはまる真理のことばです。『みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。』というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分のために寄せ集め、真理から耳をそむけ……。しかし、あなたは、どのようなあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として(クリスチャンはあかし人として)働き、……務めを果たしなさい』(Ⅱテモテ4章)。

◆木村清松と日本伝道

小松川教会牧師 東海林昭雄



木村清松は1874年(明治7年)

に、新潟県の五泉に生まれた。清松は実に熱烈、雄弁な説教者で、彼を有名にしたエピソードとして、ナイアガラ滝の話を通じて通ることは出来ない。彼はナイアガラの滝を訪れた時、雄大なその風景を眺めていると、一人のアメリカ人が、「どうです。このような大きな滝は日本にはありません」と、肘で彼の腕をつきながら、どこにもあるお国自慢を始めたが、その時、清松は「君はクリスチャンでなければこの滝を自慢することは出来ませんよ。この滝をもっているのは我々の父、否、私の父です。この滝位のもの、私のお父さんにしてみれば小手先の仕事です。どうです。私のお父さんの滝は。由来、父のものは子のも

である。故にこのナイアガラの滝は我輩のものである」と喝破したのであった。その帰り道、電車乗り場で百人程の待合客を相手に、「天の父を誇り、神を知らざれば滝を誇るにあらず」と路傍説教をし、このことがデトロイトの新聞記者の耳に入り、清松の写真入で、「彼の父はナイアガラの持ち主である」と誇大に書いたものだから、なにはともあれ偉い奴が日本から来たというので、その面なりを見たいという所から、一週間の大伝道会は大入り満員であったと言う。

生い立ち

清松の家は浄土宗で、家業は地酒の醸造と酒、味噌の原料となる麹の製造であった。父は商売熱心で、働き者であったが、一方、酒をよく飲み、怒り上戸で、よくお膳をひっくり返して、清松の母を困らせていた。母はそのような時、必ず息子たちに対して、「酒は気狂水だぞ。お前たちは決して飲むな。酒飲みになってはならないぞ」と訓戒し、子供たちもこの教訓を身に沁みて、受け取ったのであった。15歳の時、清松は悪友に誘われて遊郭に入りかけた時があった。しかし、彼は悪友たちの隙を見て脱兎のごとく逃げ出した。彼はその日、家に帰り、床に入った時、「俺はあの連中と一緒にあった

ら人間になれない。俺はこの町にいたら出世しない。あいつらと一緒に悪所通い覚えて、そして唯その日だけを過す人間になるに決まっている。ああ恐ろしいことだ」と考えると共に、もう一方において眼の辺りに見えて来るのは、新潟から地方講演に来たキリスト教主義の北越学館の松村介石先生と生徒たちの演説会であった。清松は松村先生の漢学素養の深い演説や、意気天をつくような生徒たちの話し振りに文明開化の香を感じ、思いを惹きつけられたのであった。そして清松は意を決して家出をし、北越学館に入学したのであった。

入信

清松は友人の松田良次郎に誘われてオツカナビックリ初めて教会に行つたが、青年牧師、堀貞一の語る「放蕩息子の話」は、父に背いて出てきた清松にとっては、殊に心に強く響いた。清松には一遍で、天地を創造された神様、そのお方は今も生きておられ、自分たちが真面目な心で帰って来るのを待つておられる、その福音を海綿が水を吸い込むように彼は理解することが出来、信仰告白に至ることとなった。

東北学院時代から渡米へ

北越学館が閉校となり、清松は東

北学院に転校し、渡米へとその後導かれた。米国へ上陸するや否や、清松が黙祷をしていると、荒くれ男が嚙タバコを彼の頬に投げつけて来た。行き通う人々の姿を見ると、二ネベの町の如く神の道を伝える必要があることを示され、清松は缶の上に立ち、ヨナのように清松は熱き涙の祈りをささげたのであった。ブローケンイングリッシュであったにも関わらず、清松の思いが伝わったのか、中には涙を催す人が少なくなかった。伝道はハートからハートに伝わるものである。

ゴーツーワーク(働け)

清松は後年、「一生懸命」を標語に振りかざし、伝道に励んだ。この言葉はムーデーの影響によるものであった。一生懸命でキリストを信じ、何もかも捨てて渡米した清松にとっては、ムーデーの一生懸命の警句が彼の心に響いたのは道理であった。1816年、郷里の五泉に五泉組合基督教会が建てられた。その土地はかつて清松が悪友に誘われて入りかけた遊郭の跡地であった。遊郭が教会へと変えられた。そこには神の摂理があると言わざるを得ない。76年の清松の生涯はただただ魂に対する情熱に徹するものであった。

八千代オンヌリ教会の

伝道と教会形成

総動員伝道委員 住吉英治

現在、総伝は千葉県下の船橋市、習志野市、市川市、浦安市の4市の教会に呼びかけ、「いのちの泉会」と称する交わり会を持っています。今回、その交わり会に参加してくださった八千代オンヌリ教会の伝道と教会形成について紹介させていただきます。

八千代オンヌリ教会は韓国のソウルオンヌリ教会を母胎とする開拓教会です。その他、大阪、東京、長野、横浜でも開拓伝道がなされている積極的な教会です。これから名古屋、神戸でも開拓が始まるそうです。

八千代オンヌリ教会を含むオンヌリ教会の伝道方法と教会形成には2本柱があるそうです。一つは「二対一」、もう一つは「QT」です。



『二対一弟子養育聖書研究』

とは「二対一弟子養育聖書研究」というテキストを用いる方法です。すでにこのテキストによって弟子養育を受けた人が、今度は弟子養育者となって次の人に二対一で弟子

養育を行っていきます。このように信徒が信徒をあるいは求道中の方に伝道し、教え、分かち合い、互いに成長し合っていくのです。このテキストは16週を通して学べるようになっていきます。

内容はI・出会い——イエス・キリスト、II・教材——QTの理論と実際、III・成長——二対一養育、聖書の学び、IV・付録、となっています。200ページに及ぶ充実したものです。



『リビングライフ』

「キューティ」とはQuiet Timeの略で、「敬虔」と呼びます。個人的に神さまと深い交わりの時を持つことです。オンヌリ教会ではQTのため教会独自で「リビングライフ」を発行しています。これは月刊になっており、ページごとにその日の聖書箇所が記され、教えられたことを書き込むようになっていきます。八千代オンヌリ教会では毎週礼拝後60分から90分QTの時間を持つていくそうです。これが信徒のみならず教会の大きな祝福になっているそうです。



八千代オンヌリ教会牧師 キム・チョルヒ



第六二話

心の病「増加」

4月16日の朝日新聞朝刊に「心の病 企業5割「増加」と記事があった。強いショックを受けた。内容は以下の通りである。この3年間でうつ病やイロローゼ、心身症、人格障害など心の病を抱える社員が「増加している」と答えた企業が52%にのぼる。1ヶ月以上の休職者がいる企業も50・9%を占めた。従業員1千人以上の大企業に限ると、7割が心の病を抱える社員が「増加している」と答えた。「増加」と答えた企業の特に目立つ年代として(複数回答)、トップは30代で39・6%、次いで20代で27・6%、40代で18・7%の順である。

心の病「増加」はどこまで突き進むのか。恐ろしい気がする。原因は企業間の競争激化、生き残りバトル、残業時間増加、先行き不安感など様々である。記事を読み進めていくうち、この国の1年間の3万人を越す自殺者数とリンクした。年代順では重なる部分が多い。私たちの回りに、いやもっと身近な家族の中に心の病を抱えた人がいるかも知れない。他人事ではない。教会はこのような人々の存在を受け止め、伝道・牧会に励んでいかなければならない。

住吉英治

3月会計

収入	336,475
活動費	98,435
ニュース印刷送	132,094
部屋代	195,522
人件費	0
積立	10,000
支出計	436,051
累計	-248,118

●ご支援、感謝いたします。今月も皆様から尊いご支援をいただき、心から感謝申し上げます。左の表のように残念ですが、マイナス会計です。でも主がご存知なので、満たしてくださいと思つて伝道の働きを継続していきます。三重県の志摩市(郡が市になりました)でトラクト配布をします。その地域では、配られたトラクトが受取人払いで返送されてくるそうです。でも地元教会の方々が「ぜひ積極的に伝道してください」とおっしゃってくださったので、皆さんのお祈りに支えられて出かけていく予定です。参加なさりたい方は早めに総動員伝道へお申し出ください。

2005年6月1日発行
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1
OCC、614号室
総動員伝道
03-3291-5035
03-3291-5266
Eメール sodoin@ybb.ne.jp
ホームページ
http://www.gospeljapan.com/sodoin/
振替 00140-1-107255
代表 姫井 雅夫
編集 住吉 英治
定価 一部10円(送料別)
印刷 新生宣教団(2,500枚)